

## 歌の二つのタイプ——茂吉の歌を例として

わたしたちが歌を作るときに、大きく分けて二つのタイプの歌があるように思われます。一つは、わたしたちの体験したこと、見たり聞いたりしたものを、とにかく説明しようとして、それを三十一文字の中へ入れようとした歌で、かりにAタイプとしておきます。もう一つは、歌の調べを重視した歌で、五・七・五・七・七のリズムにのせて歌う場合で、これをBタイプとしましょう。Aタイプは、意味を重視しますから、多少リズムがこわれても、「なにかを言う」という方に力が入ります。Bタイプでは、なるほど調べは美しく、耳から聞いてころよいのですが、内容はありきたりの平凡なものになる怖れがあります。

もちろん、調べもよく、意味内容も充実しているのが理想ですが、現実はなかなかそうはいきません。AとBをあわせたCタイプの歌は、すくないのも事実で、そこには歌という定型詩（五・七・五・七・七という音数のリズムが先にきまつている詩）のもつ生理的なものがあるのかもしれない。

斎藤茂吉（一八八二—一九五三年）という歌人も、その生涯でい

ろいろ歌風をかえた歌人であります。今回は、茂吉が四十代のはじめごろに、本職の医学の研究のためヨーロッパに留学していたとき（大正の末期ですが）に作った歌をとりあげて、このAタイプBタイプの歌を検証してみたいと思います。留学期間も後期に入って、茂吉は、ドイツのミュンヘンにいました。

はるかなる国とおもふに狭間には木精おこしてゐる童子あり  
イサールの谿のこだまは谿かげに七のこだまとなりて消えたる  
ひるすぎのおもき空気にふるひ来る遠雷は川のみなにかみ

大正十二年（一九二三）のことで「九月二十三日（日曜）イサール河」という詞書がついています。これは、日記がもとにあつて、日記を見ながら、思い出しながら作ったということを示しています。

それにしてもこの三首は、歌の調べを第一にした、Bタイプの代表のように思われます。「はるかなる国とおもふに」という一、二



句は「ここは母国日本から遠くはなれた国だとおもうのに」という意味ですが、ドイツだとかミュンヘンとかイサールとかいう固有名詞は出て来ません。「ハザマ」「コダマ」が韻を踏んでいるようであり、同じく三音の漢字「童子」が結句に来て、一首をおだやかに締めくくっています。

二首目も同じで、「こだま」ということは二度、「谿」ということは二度くり返されています。いわゆるリフレイン（畳句）という手法で、歌謡などにはよく使われます。「七のこだま」の「七」などというのも、算えて七つというわけではなく「たくさんの」という意味を、ややロマン派風に「七」という、ア母音のくりかえし（「ナ」と「ナ」）のことは使ったのでしよう。ところで、ミュンヘンの東を流れる川は、ふつう「イサール」といい「イ」に力点を持つのですが、茂吉は、これを「サ」に力点をもつ日本流の「イサール」に書きかえています。茂吉には、大正末帰国後に書いたたくさんのヨーロッパ体験に基づくエッセイがあつて有名ですが、その中に「イサール川」というのがあります。医学研究生活に飽いたり、故国を思つてさびしくなつた折など、しばしばイサール川のほとりを歩いて心を慰めたことが書いてあり、この「九月二十三日」の経験についても細叙してありますが、そのタイトルは「イサール」ではなくて「イサール」です。つまり「イサール」という呼び方は、茂吉が歌の場合にとつた一つの態度ともいえます。調べを重視していたことを示しています。

三首目の「ひるすぎの」の歌もなかなかいい歌ですが「遠雷」を「とほいかづち」と和語（うたことば）に砕いたり「川のみなかみ」

と結句を名詞止めにしたりにしています。それが上の句の調べと調和しています。上の句は「空気」がやや固い漢語の名詞ですがあとは、ひらがなの多い、歌らしい調べになっています。

さて、このような歌のとなりには、やはりこれもミュンヘン生活の歌で、同じく歌集『遍歴』（これが留学中の日記から作られた歌集で、『遠遊』という留学前半の時期の歌集と並びます）の中の次のようなものはどうでしょうか。

ミュンヘンを中心として新しき原動力は動くにかあらむ  
警察時間夜の十時にのびしかど大学全部けふ休講す

ヒットラアのため命おとしし学生の十数名の名がいでて居り  
イサールの橋のたもとを国軍が占領したれば戒厳終らむ

同一年十一月九日より十五日まで、いわゆる「ヒットラー事件」がおきて、ナチス・ドイツののろしがあつたのに茂吉は偶然出会いました。このあと長くヨーロッパの、世界の歴史をかえてしまつた政治的事件の端緒でした。こういう事柄を歌うとなると、どうしても、この四首のようになりがちで、これは典型的なAタイプの歌でしょう。それでも茂吉はいろいろ工夫して、なんとか歌の調べを保とうとしているのがわかりますが、さきあげた「イサール河」の歌の、郷愁のひびきとは、全く違つた歌になっています。

わたしたちも、この二つのタイプの歌の領域について自覚的であつた方がいいと思うのです。